



1

この本をお読みになった方へお願い

あなたはこの本を読まれて、どんな感銘を受けられたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。なお、このつきには、どんな本を読みたいとお考えですか。この本には、一字でも誤植がないようにと願っておりますので、もしも、お気づきの点がありましたら、あわせてお教えください。お手紙には、ご職業や年齢なども書きそえてくださいませんか。

東京都文京区音羽町三ノ一九

光文社

神吉晴夫

長編推理小説 盗作の風景

昭和39年1月25日 初版発行

検印廃止 ￥280

著者 ささ 笹 沢 左 保
東京都目黒区上目黒6-1428

発行者 神 吉 晴 夫

印刷者 堀 内 文 治 郎
東京都千代田区神田三崎町2
堀内印刷

発行所 東京都文京区音羽町3 株式会社 光 文 社
振替東京115347

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。(関川製本)

表紙の模様・意匠登録 116613

© Sao Sasazawa 1964

長編推理小説

とう さく ふう けい
盗作の風景

ささ ざわ さ お
笹沢左保



カッパ・ノベルス

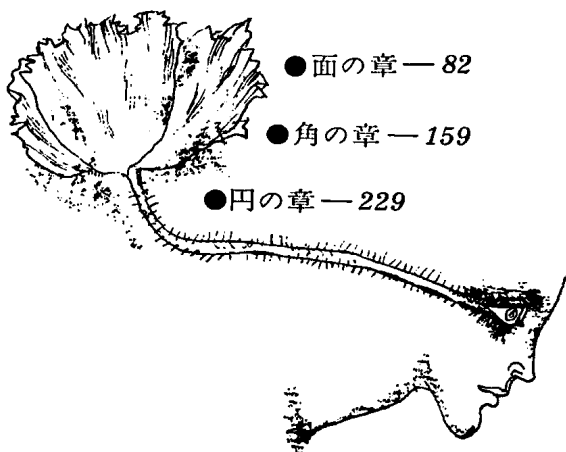
●目次

●線の章—5

●面の章—82

●角の章—159

●円の章—229



写真

大 島 浅
坪 内 田
晋 英 和
作 佑 男

線の章

1

駅前の広場に出たときから、江原麻知子は乾ききった空気を感じていた。それは上州名物の空っ風のためといった、気象の問題ではなかった。江原麻知子の胸のうちにある、暗い観念が、目に映ずるもの、耳に聞こえるもののいっさいに情緒を感じさせないのである。

東京の上野から、群馬県高崎市までは急行で

わずか一時間三十五分ほどである。江原麻知子は今日、上野発十四時五十二分の急行『妙高』に乗った。高崎着は定刻どおり、十六時二十七分だった。

しかし、旅には違いなのである。たとえ一時間であっても、列車に乗れば、東京の人間には旅行の気分が強まるのだ。東京という大都会に生活の範囲を持っていると、ほとんど他の土地へ行く必要がなくなる。それに、タクシーというものに乗りつけている都会人は、多少費用は高くついても、近県へ出かけるには自動車を利用しがちである。道路が整備されるにつれて神奈川、千葉、群馬、長野、茨城などの各県へ気軽にドライブに出かける人種もふえてきた。それだけに、旅行気分と列車というものが密着してきたのかもしれない。乗っている時間にかわりなく、列車を利用すれば旅に出たという

気分を味わえるのだ。

江原麻知子にしても、そうだった。去年の暮れ、静岡^{しずおか}まで行ったときは、東京をはるかにはなれた旅先にいるような気になって、淡い旅愁にさえもとらえられたくらいだ。これが、東京育ちの二十三歳の女の感覚というものなのだろう。

だが、今日の小旅行は、そうはいかなかった。上野駅で乗り込んだときから、すでに気持は重かった。それは、列車が高崎に近づくにつれて、しだいに砂を噛むような味気なさに変わっていった。高崎についたところは、胸の中がからっぽになったように、気持が乾ききっていたのである。

ただ漠然と出かけてきた旅行ではない。もちろん、遊びに高崎までやって来たのでもなかった。人に会う目的があつての旅行だった。それ

も、楽しく目的を果たせる期待は微塵^{みじん}もないのである。

旅の情緒どころではなかった。今日の江原麻知子にとって、高崎は、高崎という土地ではなく、x点とする目的地にすぎなかった。高崎がどのような街^{まち}で、どんな気候で、何が名物で、とそれらのことはいっさい無関係だった。たとえば、荒野の一点に『高崎市』という道標が打ち込んであつて、ここが目的地だと言われても、江原麻知子は動じなかったに違いない。その土地へ行きつくことではなくて、そこにいる人間に会うことが目的なのだからである。

えてして、こういった旅行は陰鬱^{いんうつ}なものである。目的に直線的に向かう場合、その人間の想^{おも}いは深刻だと言つていい。脇目をふるだけの余裕もないのだ。江原麻知子は、自分と同じような目的で列車に乗っている人間は、おそらく一

人もいないだろうと思った。商用で旅行するなら、同じ緊迫した気持ちでいても、まだ救われる。少なくとも期待を伴った建設的な気分であられるからだ。

若い娘が最も深刻になるのは、対異性関係か愛情問題で苦悩している場合だろう。今日の自分もそうであればいいのに、と江原麻知子は念じたいくらいだった。別れ話のために高崎まで愛人に会いに行く、失恋して東京にいたくなくなり、苦痛のあまり旅に出る。現在の自分がこんなであったなら、どれだけ気が楽だろうか。江原麻知子と思うのである。

高崎駅前には地方都市のそれらしく、バスの発着で混雑していた。広い駅前の通りには、無統制に車が駐車している。バスの車掌の笛の音が、呼応するようにあちこちで鳴っていた。遠距離バスの出発を、マイクの声が報じている。

赤と白色のレンガを積み上げたような駅の建物が、傾きかけた陽光の日射しに照らし出されていた。ビルがないせいか、日射しの範囲が広がった。

江原麻知子は駅前にたたずんで、一つ深々と呼吸した。ハーフ・コートのポケットから手紙をとり出して、彼女は改めて封筒の文字を眺めやうとした。この手紙の差出人がいる土地へきた――と、かすかに緊張感が胸の奥で凝縮する。

都内目黒区三谷町一二六番地

江原庄吉郎殿

封筒の表側には、こう書いてあった。封筒の裏面を返すと、高崎市新町六番地東日新聞社高崎駐在員連絡所と印刷されてあって、その脇に能坂魚男とペン字で記されてある。つまり、東日新聞の高崎駐在員である能坂魚男という男から、江原麻知子の父親宛に送られてきた手紙だ



高崎駅

った。

江原麻知子は、駅前に停車していたタクシーの運転手に声をかけた。

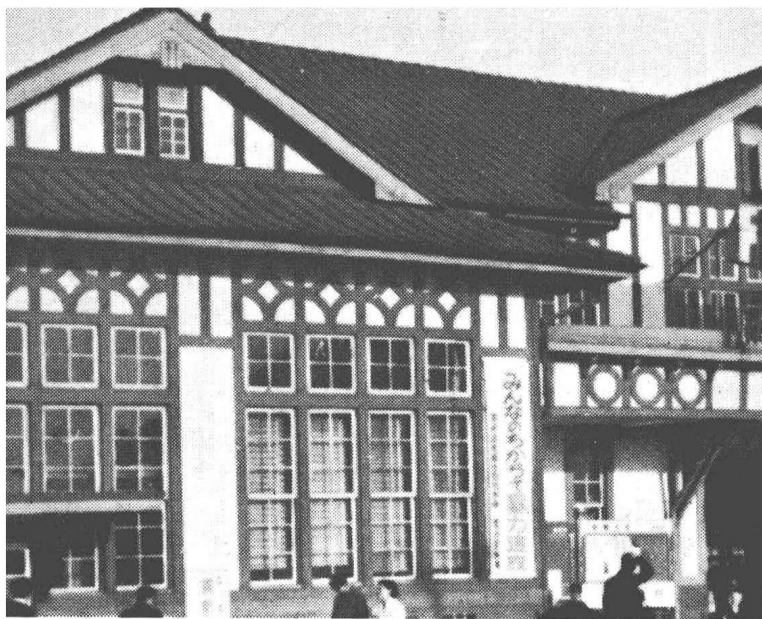
「ちょっとお尋ねしますけど……」

「はあ？」

頬の赤い三十前の運転手は、江原麻知子に顔を近づけられて、戸惑ったように目をまたたかせた。朱色に黒の斜線が流れたスーツに、同じ布地のハーフ・コートという華やかな服装と、目鼻立ちのはっきりした江原麻知子の近代的な美貌を見て、運転手は、この土地の女ではないと察しをつけたらしい。心持ち緊張した面持ちで、運転手は江原麻知子の次の言葉を待っていた。

「東日新聞の高崎駐在員連絡所というところを、ご存知ないでしょうか？」

「東日新聞の？」



「ええ。高崎市新町六番地なんですが」

「新町だったら、この駅前通り一帯がそうなんですがね。この通りをまっすぐ行った左側に、たしか東口新聞という看板があったと思います
が……」

運転手は首をひねりながら言った。

「どうも、ありがとうございます」

麻知子は礼をのべて、タクシーのかたわらを離れた。運転手は自信なさそうな口ぶりだったが、その東日新聞の看板が出ているところが駐在員の連絡所に違いなかった。東日新聞は一流紙ではない。販売網の密度も地方では、たかが知れている。高崎市内でも、東日新聞の看板を出しているところは、一個所ぐらいのものだろう。

麻知子は駅前通りの左側を歩いた。歩道に面して、バスの車庫や昔風の旅館、それに食堂な

どが並んでいる。駅へ向かってゾロゾロ歩いてくる男子高校生が、麻知子とすれ違いながら饒舌の断片を残して行った。

三、四十メートルほど歩いたところで、麻知子は『東日新聞』の看板を見かけた。その看板は、ガラス戸をしめきった家の底の上にすえてあった。麻知子は、ガラスを通して家の中をうかがった。

この家は煙草屋で、店先の半分を東日新聞の駐在員連絡所に貸しているらしかった。右側が煙草売場になっていて、左側のコンクリートの三和土には、古ぼけたテーブルと椅子、それに薄よごれたソファが並べてあった。テーブルの上に電話機が置いてあるだけで、人の姿は見当たらなかった。

麻知子はガラスに浮き出ている『東日新聞高崎駐在員連絡所』という金文字を確かめてか

ら、戸に手をかけた。

ごめんくださいと声をかけると、煙草売場から中学生らしい女の子が顔をのぞかせた。

「なんですか？」

と、女の子はもの珍しそうに麻知子を眺め回した。

「あのう……東日新聞の駐在員の方にお会いしたいんですけど……」

相手が少女であっても、麻知子の口辺は硬ばった。

「能坂さんですね？」

少女は目で笑った。どういうつもりで笑ったのかわからないが、少女の顔が、にわかに大人っぽく見えてきた。

「ええ……」

麻知子はうなずいた。駐在員に会いたいという、少女はすぐ能坂の名まえを口にした。た

ぶん、東日新聞の高崎駐在員というのは能坂魚男きりいないのだろう。

「能坂さん、お客さんよう！」

と、少女は奥へ向かつて大声を張り上げた。

麻知子は全身を堅くした。初めて来た土地で、未知の人間に会うときの心細さばかりではない。相手は、少なくとも麻知子の敵と言える能坂魚男なのである。どんな男か——と思っただけで、麻知子はすでに不安だった。

麻知子は俯向いた。コンクリートの三和土に、麻知子の薄い影が落ちてゐる。その影の部分を除いて、三和土が妙に明かるく照らし出されてゐるのは、薄暮に近い日射しが黄色っぽいせいだろう。

正面の棧の細かい障子があいて、男が三和土へおりて来た。サンダルを引っかけた音に気がついて、麻知子は顔を上げた。一瞬、麻知子の

視線は、印象を含めて男の全身へ走った。

男は茶色のセーターに、よれよれの黒ズボンという服装だった。午睡をむさぼっていたのか黒ブチの眼鏡をずらして眠たそうに目をこすっていた。髪の毛は乱れていて、後頭部のあたりでは逆立っている。色白の冷ややかそうな顔立ちで、父親の話では二十八と聞いて来たが、年齢よりはるかに老けて見えた。

「能坂ですが……」

男は手でソファにすわるようすすめてから、そう言った。

麻知子は、ソファに腰をおろした。ギシギシと、スプリングが軋んだ。能坂魚男とは初対面だから、相手もむろん、麻知子であることを知らない。それに能坂魚男は、麻知子が高崎まで出かけて来るとは予想すらしていないに違いなかった。

「で、ご用件は？」

と、ここで初めて能坂魚男は麻知子を正視した。なかなかの美男子である。目の鋭さには、よく言えば情熱的、悪く言えば激しい気性が感じられた。

能坂魚男は麻知子の名まえも確かめずに、用件を訊こうとする。人生相談か珍しい話題を持ち込んで来た読者に、新聞社の駐在員として接する気にいるのだろうか。

「わたくし……」

麻知子は、能坂魚男が向かい合いの椅子にすわるのを待って、口を開いた。

「能坂さん……個人としての、能坂さんにお会いしたくて参りましたの、東京から……」

「東京から？」

ピースの罐にのびしかけた手をとめて、能坂魚男は眉をひそめた。

「そうです」

「プライベートの問題だと、おっしゃいましたね？」

「ええ」

「あなたは？」

「江原麻知子……江原庄吉郎の長女です」

「江原の……！」

能坂魚男は椅子から腰を浮かせかけていた。左手にはガス・ライターを握ったままである。目つきも陰しくなり、顔色も心持ち蒼ざめたようだった。能坂魚男のそうした気配を察して、麻知子の緊張度も高まった。

「お嬢さんが……一体、ぼくになんの用があるんです？」

能坂魚男は思いなおしたように、椅子に腰をすえなおすと、荒々しい仕種で脚を組んだ。不貞腐れた少年のような態度だった。

「あなたの、父にあてた手紙を拝見したんです」
かすれる声を、麻知子は咳せきばらいして正常に
戻した。

「あなたの家では、個人宛の手紙を家族全員に
披露するというのが家風なんですか？」

能坂魚男は吐き捨てるように言った。

「いいえ。そういうわけじゃないんですけど……」

「なぜ、あなたはぼくの手紙を読んだんです？」

「この二、三日、父が暗く沈んだ表情でいるからです。わたくし、父に質問しました。父は事実をしゃべってはくれませんでした。そんなとき……わたくし、父の部屋のテーブルの上にあった、あなたの手紙を見つけて……読んだんです……」

「手紙を読んだだけですか？」

「いいえ、話は父から聞きました。わたくしが

あなたの手紙を読んでしまっただけでも、しつこく尋ねるので、昨夜、父はいちおうの経緯いきさつだけはうちあけてくれたんです」

「それならもう、ぼくと話し合うことはないでしょう。お嬢さんが江原庄吉郎から聞かれた話のとおりです」

「だから、このまま知らん顔をしていろとおっしゃるんですか？」

「お嬢さんには、無関係なことです」

「いいえ、関係がないはずはないでしょう。わたくしは江原庄吉郎の娘です。わたくしばかりじゃありません。母もいますし、妹も弟もおります。父が危険にさらされる、ということは江原家の家族全員の問題です」

「危険にさらされる……？」

と、能坂魚男は嘲笑するように口もとをゆがめた。

「あなたの手紙からは、そのように感じとれます。あなたのお手紙は、一種の脅迫状ですから……」

麻知子も、かなり極端な言い方をした。相手が初対面の人間であり、できるだけ気持をやわらげなければならぬ能坂魚男であることを忘れていたのは、麻知子も興奮している証拠だった。

「人聞きの悪いことを言わんでください」

果たして、能坂魚男は憤然とした口調になった。

「ぼくは、脅迫状を送った覚えもないし、あなたのお父さんを危険にさらすようなことはしていません」

「言いすぎでしたら、お詫びします」

しまったと思い、麻知子は狼狽ろうばいぎみに頭を下げた。能坂魚男に抗議するために高崎へ来たの

ではない。いわば『和』を乞いに、能坂魚男を訪れるのが目的だったのではないか。相手を怒らせてはいけない。能坂魚男を刺激するような言動は避けなければならぬ——これが、麻知子の高崎行きの絶対条件だったのである。

「あなたは、江原庄吉郎に頼まれて、ぼくのところへ見えたのですか？」

能坂魚男は、麻知子を見下すような目で言った。彼はあきらかに、自分の立場が優位にあることを意識している。

「いいえ、わたくしの独断で参りました」

と、麻知子は下唇を噛んだ。

「若い娘のあなたが、独断で……。会って話せば、ぼくが鼻の下をのぼして、すべてを水に流そうという気になる。そんな安易な考えで、高崎くんだりまで出かけて来られたわけじゃないでしょうね」

「もちろん、そんなつもりではありません。昨夜、父からいっさいをうちあけられて、一晚眠らずに考えた末に、あなたとお会いしてという決心をつけたのです」

この麻知子の言葉に、誇張はなかった。事実昨夜は、一睡もしていないのである。能坂魚男に会ってみようと思いついたのも、麻知子にしてみれば、ほかに得策を見いだせなかったからだ。

「ぼくに会って……それから、どうするつもりだったんです？」

「ただお願いしようと思って……」

「あなたの言葉に、ぼくが、耳を貸さなかったら？」

「わたくしたち、まだ話し合いもしてないんです」

「しかし、ぼくがあなたの言うことを受け入れ

る可能性は、非常に薄い」

「でも、なんとか……」

「代償は用意されて来たんですか？」

「代償？」

「まあ、いいでしょう。せっかく東京から来られたんだから、話し合いぐらいはしましょう。ここではどうも殺風景ですから、いいところへご案内しますよ」

かすかに笑いをただよわせながら、能坂魚男は立ち上がった。その反動で、回転椅子が一回転した。

代償を用意して来たか。いいところへ案内しよう。——この二つの言葉を結びつけると、麻知子は若い女として好ましくない場面を想像しないではいられなかった。女の弱味につけ込んで、肉体を求める男——こうした状態に、現在自分が追い込まれつつあるように思えてくるの